周囲の低俗との宿命的連帯感の悲劇

——一つの *The Mill on the Floss* 論——

和　知　誠　之　助

Adam Bede の思いがけぬ大成功によって小説家としての自信を与えられた George Eliot は，1858年末その作に最後の筆をおくとすぐ新しい物語の構想にとりかかった。田舎の生活を描いたもので，*Adam Bede* と同じ位の長さで，それの一種の姉妹篇になるだろうと，1859年3月31日付の手紙で John Blackwood に伝えている。[1] G. H. Lewes によれば，それは想像力の生み出した哲学的なもので，全く新しい快く刺戟的な物語である。[2] 4月26日に短篇 "The Lifted Veil" を書き終えるとすぐ翌日に書き初められ，いくらかの不安を伴ってはいたが，長い間心の中に蓄積されていたものが一挙に溢れ出るかのように，*The Mill on the Floss* は1860年3月21日に書き上げられた。この作品で作者は自らの精神的遍歴を取扱おうとしたと思われるが，人間的未熟さとそれに伴う苦悩のために，いくらかの面で欠陥を露呈することになったけれども，鋭い感性がその特性を最高度に発揮して，George Eliot の作品の中でも最も詩的密度の高い感動的な作品になった。プルーストも，時間の流れの中に人間生活の神秘な複雑さを探るこの作に感銘を受け，彼自身の小説の構想に大きな影響を与えられたことをその書簡の中で語っている。

1）Cf. *The George Eliot Letters*, 7 vols., edited by Gordon S. Haight (Yale U. P., 1954-6) ……以後 GEL と略す……Vol. III, p. 41 : 'my new story, which will be a novel as long as Adam Bede, and a sort of companion picture of provincial life.'

2）Cf. GEL, III, p. 55 : G. H. Lewes to John Blackwood, 21 April 1859: 'this story is of an imaginative philosophical kind, quite new and piquant.'

これは鋭敏な感性と豊かな知性に恵まれているために却って，高い憧憬と強い自我の欲求とに悩まされる Maggie Tulliver の，異質な家族・社会への反応の悲劇である。物語は Maggie の 9 才の時から始まるが，その頃から既に彼女はさまざまの障害に悩まされる。巻毛にしようとする母を怒らせる真直ぐな髪，ジプシーを思わせる灰色の皮膚，激し易く物忘れすることの多い性格——これらは多感で自尊心の強い少女 Maggie が自身の中に発見した障害であるが，この世の中は "uncommon puzzling" だと口癖のように云う彼女の父 Mr Tulliver と同じく，Maggie にとっても，その現実はひどく訳の分らない当惑させるものである。なかでも彼女の小さな敏感な心を最も痛めさせるものは，彼女が偶像視する兄の Tom である。彼は母方の叔母 Mrs Glegg, Mrs Pullet, Mrs Deane によって代表される Dodson 家の血をひいて，強い意志・正義観をもち，感情のかすみによって曇らされない目を持っているが，感性・知性ともに乏しい散文的少年で，Maggie のひたむきな愛情を理解できない。

美と知識へ向ける Maggie の激しい渇望も，このような，彼女とは異質な周囲に阻止されて，人形に釘をさしたり壁にぶっつけたり，罪もないいとこの Lucy Deane をぬかるみに押したり，ジプシイ村への逃亡を企てたりして，徒らに小さな魂を動揺さすだけに終る。平板・現実的で，固定観念に支配された社会の慣習が是認する生き方から抜け出そうとする，子供なりに懸命な努力も無益なことを知った彼女は，次には，自らの資質を抑圧することによって苦痛を逃れようと，徹底した自己否定に陥る。彼女は自らと異質なもの——Tomによって象徴される慣習的・物質的世界——からも愛されることを望む女性であるからである。然し根本的には彼女は形式化した宗教にも，物質的繁栄にも信頼をおけない。自己を生かそうとする生来の烈しい欲求は，びっこだが感受性強く，芸術的感覚をもつ Philip との淡い友情にまず現われる。しかし Philip の父で弁護士の Wakem のため Mr Tulliver が訴訟に敗れ，その苦慮で落馬し，病気になるに及び，Wakem 父子に対する Tom の憎悪が増し，Maggie の Philip との淡い友情も阻止される。

Tulliver 家の破産の後，Tom は独力で一家の再建に励み，やがて借財を返すまでに至ったことを喜んだ Mr Tulliver は，興奮と歓喜のなかで Wakem を打つが，その興奮のあまり彼が死んだ後，Maggie は水車小屋を去って，St. Ogg's の町に住む Lucy の家に暫らく滞在する。Lucy は Stephen Guest と婚約している。しかし Maggie と Stephen とはいつしか互いに心魅かれ，ある日洋々たるフロス河で彼等二人を乗せたボートが予定地を過ぎて遠くへ流され，その日のうちに町へ帰れなくなった時，Maggie は Stephen に結婚をせまられる。しかし彼女は苦悶のうちにそれを拒絶し，単身町に帰るが，Tom からも町の人々からも白眼視され続ける。ある日突然大洪水が町を襲うと，Maggie は小舟で兄を救出する。Tom の心には人生の深さについての新しい啓示が訪れ，兄妹は初めて心の融合を見るが，二人を乗せたボートは一瞬のうちに波間に没する。

以上が *The Mill on the Floss* の物語の概略であるが，この作品には自伝的要素が濃厚で，Maggie は肉体的容貌以外のほとんどすべての点で，若い Marian Evans を思わせるものをもっている。Tom も作者の兄 Isaac に，Dodson 家の人々も作者の父の後妻 Pearson の姉妹に原型が見られると云われている。Philip のモデルと云われる人も指摘されている。[1] しかしこの作品は，Leslie Stephen の語をかりれば，'a spiritual autobiography'[2] であって，決して作者の経験が生のまま提出されたものではなく，この前の *Adam Bede* と比べてはるかに芸術的に成長している。

経験的事実との密着性は，Maggie の幼時を取扱った前半に特に顕著であって，そこには1869年作の "Brother and Sister" と題する11の sonnet 連作の中に歌われた兄妹の幼時の情景とほとんど同じものも描かれている。しかしこの作では単なる回想に終ることなく，少女の心理の鋭い洞察が見られ，少女の悲しみと歓びをこれほどまざまざと描き出したものは，英国小説全体の中でも数少ないと云われている。それは「幼年時代は黙想と回想において

1） Cf. GEL, I. lxiv.

2） *George Eliot* ("English Men of Letters"), London, 1902.

のみ美しく楽しい時期である。——子供にとってはそれは意味も分らぬ深い悲しみにみちている。」[1] ことを知っていた作者によってのみ描きうるもので，子供の目を通して見られた幼い魂のありのままの情感が痛ましいまでの切実さで読む者の胸を打つ。

しかしこの部分は，単に少女の鋭い心理洞察のみでなく，*Adam Bede* の場合と同じく，古い伝統に根ざしたイングランド中部の一地方の住民の生活を，哀歓とヒューマーを交えて描き出している。兄と妹，彼等の家族と親戚，即ち Tulliver 家及び Dodson 家の血をひく人々の織りなす人間模様は，周囲の自然的環境を背景にして，魅力あふれる絵を構成する。特に Maggie の母方の伯母と伯父達はヒューマーにみちた適確な筆で描かれ，19世紀初頭のイングランド中部の中産階級の家庭に読者はひき入れられる。ここに見られるヒューマーは Jane Austen を思わせるが，笑いの対象を個人の一時的現象としてよりも，その中に伝統あるいは慣習という，時の流れを見ているだけに，人間生活の流れのよどみとも言えるものが，人間一般への悲しみを隠して笑いの中に提供されている。遺産を残してくれないような隣人のためにも涙を流すひまと金がある程身分がよく，新しい帽子を妹に見せるのに大騒ぎする Mrs Pullet，一家の破産にあたって娘時代の名の入った家具や衣類の失われるのを嘆く Mrs Tulliver——物質と慣習に支えられた彼等の安易な安定，愚かな執着を笑うこともできるし，それに抵抗することもできる。しかしそれを否定することは Maggie の存在を否定することになることを George Eliot はよく知っていた。作者は笑いの中に限りない愛着をこめて，田園地帯の人間模様を綴って行く。それらが Maggie の生活の方向を規制する重要な要素であるからである。

次から次へと提供される日常生活の詳細——Tulliver家のみならず，Pullet 家，Glegg 家などの中流階級の居間，また貧しいけれど愛情あふれる Bob

1) GEL, I, p. 173: 'Childhood is only the beautiful and happy time in contemplation and retrospect — to the child it is full of deep sorrows, the meaning of which is unknown.'

Jakin の小屋など，地方の小都市の種々の階層の家庭の内部のみでなく，洋々と流れるフロス河の両岸に広がる地味豊かな牧草地，低い静かな音をたてる小さな流れに枝を垂れる柳や，石橋の近くの水車場，また赤い屋根や所々に高い樹木のそびえたつ生垣の間の小道を通って銀行や波止場にも，また競売の場にも読者は案内される。これは農園地帯と商業都市の交叉点であり，伝統的軌範，固定した因襲的倫理観に支配される人々は，物質と慣習によって安易な堅実さを保証されながらも，積み重ねられた偏見や習俗のため時の流れを見ることができず，宗教も形式化して病める魂の救いにならないような変動期の社会である。これは「自然が継続し生長したもののような印象を与える古い古い町の一つ」であり，「一千年も年古りた木のように長い成長と歴史の痕跡を運びつづける町」(I, p. 178; Bk, I, Chap. 12.)[1] である。そこに住む人々は長い過去を無批判に受けつぎ，時勢の推移を見る目をもたず，無知が知識より気楽な時代であった。このような生活感覚の中での敏感，誠実な魂は，疑いをもたずに習慣に流される安易な生活をすることはできないが，といって時が積み重ねたものへの愛着をたち切ることもできない。異質なものへの抵抗と異質なものとの宿命的連帯感との矛盾をはらむ魂にどのような道が残されているのであろうか。

平凡で坦々とした外見の底に解きがたい困難を暗示するこの導入部は，誠実な精神と平凡な環境との悲劇的相克という主題を徐々に展開して行く。この作品は，George Eliot の他のすべてのものと同じく，内的世界と外的世界の錯雑した相互作用の探究であって，Maggie の魂の動揺は，その周囲の実体が明らかになるにつれ，その悲痛さを増して行く。

しかしながら，この部分は余りに長すぎて作品全体の調和を損じているという印象はぬぐい得ない。作者自身もその欠陥を認めて，次のようにその理由を説明している。

1） I, p. 178. は Cabinet Edition (William Blackwood & Sons) による巻，頁を示す。(以下同じ。)

To my feeling, there is more thought and a profounder veracity in 'The Mill' than in 'Adam'; but Adam is more complete, and better balanced. My love of the childhood scenes made me linger over them; so that I could not develop as fully as I wished the concluding "Book" in which the tragedy occurs, and which I had looked forward to with much attention and premeditation from the beginning. (GEL, III, p. 374).

Adam Bede の方がより完全で，より調和がとれていると作者は述べているが，より調和がとれているというより，物語の展開がより合理的になりすぎて却って真実性を失っているのである。が *The Mill on the Floss* では，作者の心情が比較的自然に働いたために，全体的には不調和もみられるが，「より多くの思想とより深い真実性」が生れた，とも考えられる。しかし Maggie の幼時とその環境の提示に余りに多くの紙面があてられたために，女主人公と Stephen Guest との関係を最初から多くの注意と熟慮とを払って構想していながら，十分に取扱うことができなかったことは作者自身認めている通りである。このため物語の最後における兄妹の死が，彼等のそれ以前の言動から避け得ない結果であるという悲劇感を与えることが少くなったことは否定できない。

取扱いが不足しているのは Maggie と Stephen との関係だけではない。なる程 Maggie の心情と苦悩が彼女を取りまく周囲の単調，低俗な生活の流れの中に周期的に交替させられて，彼女の魂の律動がその生活環境に左右されて展開する経過は十分に示されている。しかし Maggie があまりに中心的に取扱われすぎていて，Tom, Philip, Lucy, Stephen などへの反応や，Maggie 以外の人物の相互関係は十分には示されていない。女主人公への関心が強すぎることは，彼女の魂の展開を感動的にして，ある点からすればこの作品に比類ない抒情性を与える結果になった。が他の面から見れば Stephen との関係の取扱いに著しいように，女主人公の言動の必然性を弱め，その真実が訴える力を減じたと言わなければならない。

しかしかような欠陥にも拘らず *The Mill on the Floss* は，*Adam Bede* と比べると，種々の点で著しい進歩を印づけている。人物描写においても，人間をあるがままに，その美点も，欠点も公正に観察することから始めるのが，George Eliot が小説を書き始めた当初からの方法であったが，これ以前の作では作中人物に対する作者の姿勢に片寄りが見られることがあった。しかしこの作では作者は作中人物に対して客観的姿勢を維持するのにかなり成功していると云える。

Dodson 家の正直さは "mean and uninteresting" だと思えると批判した *Times* 紙 の論説を読んだ George Eliot は，その誤解は彼女の表現の拙さのためではないかと驚き，作中人物に対する作者の客観的態度を次のように説明した。——「私自身の感情と意図とに関する限りでは，どんな階級の人も，どんな型の性格も非難にさらしてはいないし，例外的に賛美することもしていない。トムはマギーと同じだけの愛情と憐憫をもって描かれていて，私自身ドッドソン家の人々を嫌うどころではないので，そんな醜い形容詞を付けられているのを知ってかなり仰天している。」[1)]

作者自身のこの説明をまつまでもなく，Tom や Dodson 家の人々の生活感情は十分な共感をもって描かれていることは，少し注意して読めば明らかである。作者は彼等を決して全面的には肯定せず，屢々ヒューマーをこめて描いているが，それは決して冷たい笑いではなく，時の経過に堪えて幾世代も積み重ねられた英知，知恵の重みを知りすぎる程知った人の暖かい笑いである。

Maggie は作者に近い存在であるだけに，理想化されていると思われがちだけれども，作者は彼女を自らから引き離して客観視するのにかなり成功している。換言すれば女主人公への愛着と隔絶とが殆んど完全に融合している

1） GEL, III, p. 299: 'so far as my own feeling and intention are concerned, no one class of persons or form of character is held up to reprobation or to exclusive admiration. Tom is painted with as much love and pity as Maggie, and I am so far from hating the Dodsons myself, that I am rather aghast to find them ticketed with such very ugly adjectives.'

が，実はこの点にこの作品に感動的な迫真性が生れた根本的理由がある。

'this hard, real life'「このきびしい現実の生活」についての何らかの説明を求めながら，平凡な環境に打ちひしがれる Maggie の魂に，作者は深い共感を示すが，同時に彼女の現実認識の浅薄さ，一方性，'her illusions of self-flattery'「錯覚的自賛」(II, p.29; Bk. IV, Chap. 3.) を決して隠そうとはしない。「彼女の考えは大抵明敏な炯眼と盲目的な夢との最も奇妙な混合物であった。」(I, p. 172; Bk. I, Chap. 11.) と幼年時代の彼女についても作者はその欠点を指摘するのに躊躇しないが，次の場合にも Maggie に向けられた作者の冷徹な目が感じられる。

> From what you know of her, you will not be surprised that she threw some exaggeration and wilfulness, some pride and impetuosity, even into her self-renunciation: her own life was still a drama for her, in which she demanded of herself that her part should be played with intensity. And so it came to pass that she often lost the spirit of humanity by being excessive in the outward act; she often strove after too high a flight, and came down with her poor little half-fledged wings dabbled in the mud. (II, p. 38; Bk. IV, Chap. 3.)

> 彼女について知られていることから判断して，彼女が自らの自己放棄の中にさえも幾分誇張と片意地，自負と性急さを投じたのは驚くことではない。彼女自身の生活はまだ彼女にとって一つのドラマであり，その中で彼女の役割を強烈に演じられることを自らに要求していた。従って外的行為で極端に走ることによって人間性を失うことがよくあるという結果になった。彼女はあまりに高く飛ぼうとして，あわれにも羽毛の生えそろわぬ小さな翼を泥まみれにして落下することがよくあった。

Maggie の内部に閉じこめられた激情の火山のような爆発，極端な気まぐれさを指摘する上の個所にも，*Adam Bede* において，Dinah を理想化し，Hetty を非難した姿勢とは異ったものが見られる。勿論それだけによって作

者の Maggie に対する姿勢が芸術的隔絶を完全に保っていると断言することは危険であり，事実，多少感傷的取扱いが見られないこともないけれども，大体において作者は Maggie に盲目的愛情を注ぐことなく，できる限り距離をおいて見ることに努め，経験的事実を虚構的要素と混ぜあわせて客観化することによって，Maggie に批判的判断を下そうとしていると言えよう。[1)]

何か美しいもの，偉大な高貴なものを渇望する多感，誠実な魂が，「悲惨と罪悪の暗いかげを創り出すような荒々しく，抑えがたい熱情のどれにも動かされない」(II. p. 5; Bk. IV, Chap. 1.) ようなくすんだ単調な現実の中での悲しみ喜びを描くことから始めた作者は，他から与えられる讃辞，優越性を認められることをひどく喜ぶ虚栄心や，常に自らの感情を大事にしすぎて他を思いやる余裕のない思い上った利己心が，現実との衝突が与える長年の苦難を通じて，次第に謙虚に，他の苦しみへの同情心へと成長する過程を丹念に追求して行く。しかし Maggie は作者にとって決して理想的女性ではない。人間一般の悲しさを免がれることはできない。彼女の Stephen との関係もその意味で提出されたものである。

Sir Edward という読者がこの作品に加えた批判の手紙を出版者から送られると，George Eliot は物語の最後における悲劇的結末に至る過程が十分に描かれていないという点と，今一つ小さな点でその批判の正当性を認めたが，第三の批判点については屈しようとせず，次のように答えた。

御批判の他の主な点——マギーのスティーブンに対する位置——は私の構想と意

1) W. J. Harvey も，この作を個人的窮境と危機を個人的感情に流されることなく描き出すという成熟へのもがきのあらわれと見て次のように述べている。
'... there seems little self-idealization or self-pity here. As such it does go some way towards meeting Leavis's criticisn. But it must be said that such instances are only intermittent and that George Eliot does not generally maintain this steadiness of view towards Maggie. Thus I would modify Leavis's diagnosis to this extent ... that instead of agreeing *tout court* that George Eliot's attitude to Maggie is the reverse of mature, I would prefer to view the novel as in itself a struggle towards maturity, towards an impersonal working out of very personal dilemmas and crises.' (*The Art of George Eliot* 〔London, 1961〕, p. 190.)

図の非常に肝要な部分ですので，それを非として考え直すことはできません。もし私がその点で間違っていれば——もし私の描いた女主人公が丹念に設定した環境の下でどう感じどう行動するかを私が本当に知らないならば，私はこの書を書くべきではなかったし，たとえ書いたとしても全く別のものになっていたでしょう。もし本質的には高潔だが大きな誤り——自らの高貴さにとって苦痛であるような誤り——を犯しがちな人物の忠実な描写を芸術の倫理が認めないならば——その時は芸術の倫理は狭すぎるので，拡大してゆく心理と合致するように広くしなければならないと思われます。[1]

作者は Maggie と Stephen との関係は十分意識して描いたことを強調しているのである。なる程 Stephen 自体が十分描かれていないことは否定できない。作者自ら他の手紙でも，第三冊目（Stephen と Maggie との関係を扱った個所以後）には一つの小説で扱うほどの材料が圧縮されていて，描くべきものを描かなかったことを認めている。[2] これは三冊で物語を完結させる当時の慣例にならって，作者が結末を急いだためかもしれない。しかし俗っぽく，浅薄な，利己的な，だて男として描かれている Stephen に，Maggie のような女性が魅かれるのは納得しがたいという批判[3] は当を得ていない。*Middlemarch* においても Will Ladislaw という俗っぽいディレッタントに Dorothea のような高貴な精神が魅かれるが，それとは少し異った意図においてではあるが，作者は Stephen に魅かれる Maggie を意識して描いてい

1） GEL. III, pp. 317-8: 'The other chief point of criticism — Maggie's position towards Stephen — is too vital a part of my whole conception and purpose for me to be converted to the condemnation of it. If I am wrong there — if I did not really know what my heroine would feel and do under the circumstances in which I deliberately placed her, I ought not to have written this book at all, but quite a different book, if any. If the ethics of art do not admit the truthful presentation of a character essentially noble but liable to great error — error that is anguish to its own nobleness — *then*, it seems to me, the etihcs of art are too narrow, and must be widened to correspond with a widening psychology.'

2） Cf. GEL, III, p. 285.

3） Cf. GHL, III, p. 317 fn.; Letter of Sir Edward Bulwer-Lytton to J. Blackwood, 4 May 1860.

るのである。二人の出会いを語る前に作者は，Maggie の経歴は「特徴を完全に知りきっても殆んど予知できないもの」(II, p. 210; Bk. VI, Chap. 6.) と述べているが，Philip にも二人の関係を次のように批判させている。

> "... I believed then, as I believe now, that the strong attraction which drew you together proceeded only from one side of your characters, and belonged to that partial, divided action of our nature which makes half the tragedy of the human lot...." (II, p. 370; Bk. VII, Chap. 3.)

> あなた方二人を引き寄せた強い魅力は，あなたの性格の一面のみから出ていて，私達の性質の中の，人間生活の悲劇の半ばを生じさすような，片寄った，分裂的行動といっしょであると，今と同じく，その時も私は信じていました。

Philip にこのように言わせたことは，作者が Maggie の人間的不完全さの一つの現われとして二人の関係を取扱ったことを裏書きしている。Stephen との出会いは，長い禁欲的生活の後で強烈な変化に富む生活への欲求に燃えていた Maggie に，背が高く，強い男に世話される歓びをかき立てた。それは彼女の張りつめ，渇した性格が漠とした興奮にかき立てられたものである。本質的には高潔で，思慮深く強い自負心をもちながらも，「自らの高貴さにとって苦痛であるような誤り」を犯しがちなために，Maggie は人間としての悲劇性を具えていると言える。Tom に釣糸の番を命ぜられながら，うっかりしてボートに釣糸をひっかけさせたり，わけもなく凧に頭をつっこんで穴をあけたり，Tom が大事にしていた兎の世話を頼まれながら餌をやるのを忘れて死なせたりするうかつさ，Tom が心をこめて迎えに来なければ屋根裏部屋から降りてやるものかと意地を張りながらも，愛されたい思いにかられて自分の方から降りて行ったり，彼女より物覚えの悪い Tom をも自分より賢いと思い，冷淡な彼が少しでもやさしくすると，いそいそと小走りに後をついて行く弱さ，或いは偏見と固定観念に支配され，物質的安楽に安住する社会からも決然と去り得ない保守性——これが美と知識を渇望し，

より充実した生活への憧れに身をこがす Maggie の他の半面である。

彼女の Stephen との関係もその一つの現われであり，それはいわば理性を越えた不可解な感情に導かれたもので，'mysterious' という語が彼女の感情，行動について再三用いられていることも，作者が Maggie のもつ矛盾を意識していたことを示している。感情を合理的に説明しようとすること自体が不合理であって，芸術の真実は現実の非合理性を非合理のまま表現することにあることを，George Eliot は十分認識していたことを上述の引用は例証している。ただ問題なのは，W. J. Harvey も指摘しているように，[1] Stephen が浅薄なしゃれ男であるという事実ではなくて，彼が芸術的に実体化されていないということであって，これは既に述べたように，作者自らも認めている点であり，それが作品の大きな欠陥になっていることは否定できない。

しかし要するに，Maggie の悲劇は人間一般の悲劇である。完全を望みながら不完全を免かれない女性の哀歓を描こうとした作者の意図は上述の手紙に明らかにされているが，作品自体も多感誠実な，しかし多くの欠点をもつ魂の，現実の場における避けがたい矛盾・動揺を感動的に描いていることは認めてよいであろう。

"Things out o' natur niver thrive." (不自然なものは決して育たない。) (I, p. 42; Bk. I, Chap. 4.) と Luke に語らせる時，作者は Maggie の悲劇を既に予告していると言えよう。しかし彼女の死は，決して Lucy の信頼を裏切ったことに対して下された懲罰ではない。異常な激情と異常な能力を具えた非凡な魂と通常の世界との避けられない衝突がこの作の主題のすべてではない。衝突を避けられないとの自覚に達しながらも，通常の世界への愛着を絶ちがたいところに Maggie の悲劇の核心がある。

宗教であれ，家具であれ，風俗であれ，すべて今まで存在したものを無条件に守ろうとする Dodson 家の人々や村人と，それに矛盾を見出し，それ以外の何かを見出そうとしながらも見出し得ず，しかも今まで存在したものにも魅かれるのが Maggie である。単に既存のものへの反抗だけであれば，彼

1) Cf. op. cit., p. 124.

女の苦しみはもっと単純であろう。彼女を異常だと思う人々からさえも愛されることを願い，彼女の行動を認めず白眼視する人々の中に，唯一の居場所を彼女は求めようとする。このような彼女が現実の場では生き続けられる筈はない。越えなければと思うものに魅かれる複雑さ，過去から未来へと続く時間の中のもがきであるところに，Maggie の苦闘の悲劇性がある。彼女の苦しみは，すべての人間に共通するものであるからである。

Maggie の苦悩は理性の欲求と情感の願望，自我と他への愛情の相克と言ってもよい。Stephen の大きな，しっかりしたやさしい手にわが手を握られた時，その歓喜にひたり切れないきびしい悲しみの中で Maggie は言う。

> "Oh, it is difficult——life is very difficult! It seems right to me sometimes that we should follow our strongest feeling;——but then, such feelings continually come across the ties that all our former life has made for us——the ties that have made others dependent on us——and would cut them in two.... Many things are difficult and dark to me; but I see one thing quite clearly——that I must not, cannot, seek my own happiness by sacrificing others. Love is natural; but surely pity and faithfulness and memory are natural too...." (II, pp.287—8; Bk. VII, Chap. 2.)

> ああ，むずかしいわ——生きることはとてもむずかしいわ。自分の最も強い感情に従うのが正しいと思われることもあります。——しかしそのような感情は，これまでの生活の全部によって作られたきずな——他の人々に私達を頼らせるきずな——と絶えず衝突します。——そしてきずなを二つに断ち切ろうとします。... 多くのことが私にはむずかしくて不明です。しかし一つだけ全く明らかに見えます。——それは他の人々を犠牲にして自分の幸福を求めてはならないし，求めることもできないということです。愛は自然なものです。しかしたしかに憐憫と貞節と記憶もまた自然なものです。

「他の人々を犠牲にして自分の幸福を求めてはならないし，求めることもできない。」と言う時，彼女は決して単に一時のように狭い禁欲主義に陥ろ

うとしているのではない。現在は過去からの連続であり，未来へ通ずるものであること，「これまでの生活の全部によって作られたきずな」の深い意味を強く意識しているからである。そこには人間生活の実体を空間という横の断面のみでなく，時間の流れという縦の連続の中にも捕えようとした George Eliot の卓越した人間観が働いている。人間の実在を個人の内面とその周囲との関連において見ようとしたことが彼女の大きな特色であるが，ここでは更に，それらすべてが過去から未来へ連続する時間の中におかれている。古きものから新しきものへの変化は，ある場合にはたとえ進歩であっても，時間の断絶は悲劇でしかない。"Out o' natur" に外ならない。そこに人間存在の永遠の悲しさがある。George Eliot は Maggie の生涯の中にその悲しさを描き出そうとしたのである。

Floss 河の氾濫は，過去から未来へ多くのものを運び続け，古い町の小さな脈搏を世界の力強い心臓の鼓動と結びつける流れが乱れることを象徴している。Maggie の，母や兄に対しての抵抗，或いは Stephen との情事への傾斜が，永遠の時の流れの乱れを誘発したと言えるかもしれない。彼女にとって，それはある意味で自然ではあっても，彼女のみでなく Tom という彼女と対照的な存在をも許す人間社会という一層大きな世界は，また，二つの相対的存在のどちらをも破壊することによって更に次へと動いて行く。これが人間社会の厳しい真実であろう。Maggie を，その過去に結びつける Tom とともに時の大きな流れの中に没しさせた作者は，美しく高貴なものを渇望する魂が，捨て去ろうとする平凡な現実に結びつけられているという矛盾をはらむ人間存在の神秘な複雑さを直視していると言えよう。作者は安易な解決をはかったのではない。洪水の襲来は，物語を急いで終らせるために用いた *deus ex machina* では決してない。

At present, I have no hope that it will affect people as strongly as Adam has done. The characters are on a lower level generally, and the environment less romantic. But my stories grow in me like plants, and this is only in the leaf-bud. I have faith that the

flower will come. Not enough faith, though, to make me like the idea of beginning to print till the flower is fairly out——till I know the end as well as the beginning. (GEL, III, p. 133.)

私は今，それがアダム程強く人々の心を動かすとは期待していません。作中人物は概して一層低い段階のもので，環境もそれほどロマンチックではありません。しかし私の物語は私の心の中で植物のように成長しますが，これはやっと葉芽の状態です。やがて花開くと信じています。もっとも，花が十分に開くまでは——初めと同じく終りも分るまでは，印刷を始めたいとは思えないほどの信念しかありませんが。

これは *The Mill on the Floss* を書き初めて4カ月位たった1859年8月17日に作者が出版者に送った手紙の一節であるが，*Adam Bede* の成功によって小説家としての自信を与えられたとはいえ，彼女が新しい作品にかなり不安をもっていたことを示している。彼女は初めこの物語の題として，"Sister Maggie" や "The Tullivers, or Life on the Floss" 或いは "The House of Tulliver, or, Life on the Floss" などを考えた。[1] が出版者 John Blackwood の提案を受け入れて，*The Mill on the Floss* に決定したと言われている。このことも作者の懐いていた不安を裏づけているが，その不安は彼女の作品との苦闘の別の表現であると言えないこともない。生きることにつきまとう困難さに解決の糸口を見出そうとする Maggie の苦しみ，更に言えば，Maggie を通じて自らの生き方をまさぐる作者自身の苦闘が原因である。種々の仮題の中からこの作品に最も適切なものを選ぼうとした苦心も，この作に描こうとした人間の生き方の複雑さを最もよく象徴するものを得ようとしたためである。

George Eliot が "Sister Maggie" や "The Tullivers" などでなく，*The Mill on the Floss* をこの作品の題に決定したのは適切であった。Maggie が物語の中心になってはいるけれども，上述のように，時間と空間の接合点が

1) Cf. GEL, III, pp. 240; 243

表題として選ばれたことは深い意味を暗示している。水車場の持主が変ると洪水が起るという言い伝えが作中で繰返される。[1] が，それは物語の結末を予告すると同時に，時の自然な流れを乱さざるを得ない人間生活の不可避な悲劇に対して時の重みの中に生きた人々の古い英和を暗示している。

平坦な沃野の中を茫洋と流れ続けるフロス河に沿って，樹木の点在する生垣ごしの赤い屋根，傍の小川に影を映ずる水車場を中心に，古い伝統に根ざし，堅実にしかし愚かしく生きる人々，素朴な愛情に結ばれた人々，或いは激情に，或いは偏見に誤りを重ねる人々，とりわけ，物質と慣習に閉ざされた平凡な社会の中で，激しく尊く生きようともがく小さな魂の動揺，習俗を捨てようとしながら習俗に愛されることを望む矛盾，人間の生命のこの永遠の矛盾と困難さを，George Eliot はフロス河畔の水車場を中心にして展開してくれた。そこにはまだ生きることの困難さにとまどいがちな作者の筆が，われしらず拙い運びをすることもあるけれども，あらがいがたい時の流れと，すべてを包む空間の広がりとの接点に立つ人間存在の不可思議さが，うす暗い屋根裏部屋で，黒びかりのする調度にかこまれた客間で，野いばらの乱れ咲く the Red Deeps の丘で，また洋々たるフロス河の流れの上で，感動的に強烈に展開され，Maggie と同じように，多くの矛盾をはらむ 'this hard, real life'を今日も黙々と生きるものの胸に強く訴える。

1） Cf. I, p. 392 ; Bk. III, Chap. 7 : "They do say as it's allays unlucky when Dorlcote Mill changes hands, and the water might all run away,... " (Mrs Tulliver が Mr Wakem に向って云う言葉。) I, p. 414 ; Bk. III, Chap. 8 : "There's a story as when the mill changes hands, the river's angry." (Mr Tulliver が Luke に向って云う言葉。)